

## 「新たに生まれなければ」

ヨハネによる福音書 3:1-15

今日の聖書の箇所は、ニコデモという人のお話です。このニコデモは、「ファリサイ派に属するユダヤ人で、議員であった」(1 節)と記されています。「ファリサイ派」というのは、聖書によく出てきますが、ユダヤ教の一派で、旧約の戒め(律法)を厳格に守っていたグループです。「議員」というのは、エルサレムの最高法院という祭司、長老、律法学者など 70 人の議員からなる議会の議員のことです。彼は、ファリサイ派の律法の教師(ラビ)であったようです

このニコデモが、「ある夜」イエスさまのもとにやってきたのです。なぜ彼は、わざわざ夜やってきたのでしょうか？朝でも昼でもなく、わざわざ夜、イエスさまの所にやって来たということに、なにか深い意味がありそうです。このニコデモについて、この福音書の後の所を見ると、彼について「かつてある夜、イエスのもとに来たことのあるニコデモ」(19:39)と記されています。この「夜」という時間帯にイエスさまを訪ねたことは、この福音書を書いた著者にとっても、特に印象深かったようです。

ニコデモがわざわざ夜やって来たことの理由の一つの理由として考えられることは、緊急性ということです。急を要する用事の場合、時間など考える余裕がありません。私も長く牧師館に住んでいましたが、真夜中にかかってくる電話は、緊急の場合が多いのです。時には、生きているのがいやになった、死んでしまいたいというような深刻な電話が掛かってくることもあり、寝る時には、いつも枕元に受話器を置いたものです。

しかし、この記事を見る限り、ニコデモの様子からは、そのような緊急性はあまり感じられません。だとすると、「夜陰に紛れて」ということが考えられます。つまり、律法の教師として、また権威ある議会の議員としての立場上、イエスさまの所に相談に行くということに気が引けて、他の人に見られたくないという思いがあったのではないのでしょうか。対面を気にし、面子(メンツ)にこだわった結果だと思われます。

その意味で、このニコデモは、この前学んだ 4 章に記されている「サマリアの女」の場合と似ているように思います。彼女の場合は、正午ごろ、シカルの井戸に水汲みに来て、そこで休んでおられたイエスさまと出会ったのですが、彼女も人を避けて、あえて誰もいない時刻を見計らって水汲みに来たのです。夜と昼という時間の違いはありますが、人との接触を避けて時を選んでいる点において共通しています。サマリアの女性の場合は、町のみんなから、「いかがわしい女」と白い目で見られ、差別されていたことから、人目を憚らなければならなかったわけです。ニコデモの場合は、彼女とは全く逆に、みんなから敬われるような律法の教師であり、議員でもあるという立場から、人を避けて、夜という時間帯を選んだということです。

社会的な身分や地位、立場の違いはあっても、人間というものは、なんと人の目を気にし、人の評価や批判をおそれ、人のことに心を奪われているか、ということをおぼわされます。自由に生きているようで、自由ではないのです。それだけ私たちは、「自分」に固執し、自分中心の生き方をしているということです。

ニコデモの場合、彼の教養や身分や社会的な立場が、彼を不自由に行っているのです。

もしかしたら、「夜」というのは、そういうニコデモの身分や立場に固執する不自由さ、彼の心の中にある闇を象徴しているのかも知れません。

彼は、イエスさまにお会いするなりこう言いました。「ラビ(先生の意)、わたしどもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしをだれも行うことはできないからです」(2節)。これは、ずいぶん丁寧な挨拶です。かなり高齢なファリサイ派の律法学者であり、最高議会の議員であるニコデモが、まだ30歳ぐらいの無名のイエスに、「神のもとから来た教師」と呼ぶのですから、これは最大級の誉め言葉です。これは単に口先だけの「おべっか」でなく、彼の本心だと思います。彼はイエスさまが行った「しるし」について触れています。この「しるし」は、2章で学んだ、カナの婚礼でイエスさまが水をぶどう酒に変えた最初のしるし(奇跡)を意味していると思います。ニコデモが、その場にいたのかどうかは分かりませんが、その噂を聞いただけでも、「神さまが共におられるのでなければ、そのようなしをだれも行うことはできない」という実感をいただいたことでしょう。

それを聞いて、イエスさまは言われたのです。「はっきり言うておく、人は新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」(3節)。ニコデモは、挨拶をしただけで、まだ何も要件を述べていないのに、イエスさまは、ニコデモの心の中にある思いを読み込んで、答えられたのです。「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」と。このイエスさまの言葉から、ニコデモが何を求めて、イエスさまの所にやって来たのか、察することが出来ます。ニコデモは、「神の国」神さまの支配を求めて、イエスさまのもとにやって来たのです。

イエスさまは、このニコデモの真面目さと熱意をお認めになったと思います。しかし、その動機に対して、疑問を呈したのです。それは、ニコデモがイエスなされた力ある業(奇跡)に心を惹かれ、神の力にあこがれているようですが、それは結局、自分自身の幸せのために他なりません。彼の思いの中には、自分の名誉や地位を維持し、それをさらに豊かにすることしかなかったのではないかと、いう気がします。少なくとも彼の思いの中には、十字架に向かわれる主イエスに対する関心と、その主に従う思いが欠落しているのです。イエスさまは、人目を避けて夜、密かに会いに来るニコデモの姿の中に、新しく変わらなければならない古い自己中心的な肉の姿を見たのです。

「人は、新たに生まれなければ、…」とイエスさまが言われたのは、そのような意図からではなかったでしょうか。キリスト教の信仰は、生まれながらの自分に何かを付け加えて、自分がさらに豊になるという「ご利益(ごりやく)」目的の宗教ではありません。イエス・キリストとの出会いによって、私たちが新しく造り変えられ、神と人とのために、仕えて生きることが求められているのです。

「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」。この言葉を聞いた時、ニコデモは次のように答えました。「年を取ったものが、どうして生まれることができますでしょうか。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるでしょうか」(4節)。

「新しく生まれる」ということをニコデモはほんとうに母親の胎内に入りなおして、もう一度生まれなおすことと考えたのでしょうか。イエスさまはこの後の10節で「あな

たは、イスラエルの教師でありながら、こんなことが分からないのか」と言っています。ニコデモには「新しく生まれる」という言葉の意味が、少なくとも肉体的に生まれなおすという意味ではなく、もっと精神的な意味で、「新しい人生をやり直すことだ」というぐらいのことは、理解できたことと思われます。ただ、すでに高齢になった彼にとって、今さら新たな人生を歩み始めるなどということは無理だ。今まで歩んできた道をそのまま歩み続けることしかできない。そういう意味で、「どうして、もう一度生まれることができましょう」と、多少皮肉を込めた言い方をしたのだと思われます。

このニコデモの気持ちは、私たちにもよく分かるような気がします。年をとるにつれ、だれでも自分で今まで歩んできた歩み、生き方、考え方、習慣、などを変えるということはなかなかできません。人は一般に、年を取るにつれて、保守的になり、頑固になりがちです。「今さら…」という気持ちでしょう。

イエスさまは、「肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である」(6節)とされました。これは歳に関わりなく、生まれながらの自分の肉の力で、いくら自分を変えて新しい生き方をしようとしても、所詮、肉から生まれた者として、肉の制限、つまり生まれながらの自分の限界を、自分の力で変えることはできない、ということです。神からの霊、聖霊の助けによって、私たちは初めて、人は自分を越えて、神の御心にかなった新しい生き方ができる、ということです。

「風は思いのままに吹く」。霊と風は、ギリシャ語では同じ「プニューマ」という言葉です。風が思いのまま自由に動くように、神の霊によって生きる者もまた、自由に、生き生きと生きる、と主は言われるのです。ニコデモに必要であったのは、そのような自由さであったのです。

5節でイエスさまは、こう言っておられます。「はっきり言っておく、だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない」。「水と霊とによって生まれる」とは、洗礼(バプテスマ)のことです。洗礼を受けるということは、古い自分、自分中心の肉につける自分に死んで、聖霊によってキリストに結ばれ、自由にキリストに従って生きるということです。それこそが「新たに生まれる」ということであり、「神の国」にあずかる生き方なのです。

イエス・キリストは、私たちがみな一人も滅びずに永遠の命を得るために、この世に来られ、十字架にはりつけにされ、高く天に上げられたのです。

さて、このニコデモが、この後どうしたのか、水と霊によって新たに生まれ変わることができたのかどうか、聖書には何も記されていません。少なくとも今日のこの箇所からからの印象では、あの「富める青年」(マタイ 19:16-30 他)と同じように、これまでの富や地位に固執して、すぐに主に従うということにはならなかったようです。

けれども、このヨハネ福音書 7章 45節以下の記事を見ると、議会の議員たちが、不当にイエスを捕らえようとした時、ニコデモ一人が反対して、「我々の律法によれば、まず本人から事情を聴き、何をしたかを調べたうえでなければ、判決を下してはならないことになっているではないか」(51)と反論し、不当な裁きを食い止めたことが記されています。また、19章 38節以下の記事によると、イエスさまが十字架にかけられて殺された後、アリマタヤ出身のヨセフが、主イエスの遺体を引き取った時、「ある夜

